



遺跡めぐりに参加して

昨年の五月下旬、地元・横浜市青葉区の地区センターの主催する「青葉遺跡めぐり」に参加した。埋蔵文化財センターの調査員の引率で、縄文から弥生の遺跡、古墳時代の古墳や横穴墓、江戸時代の庚申塔や板碑などを見て回った。

考古学や古代史、遺跡めぐりは元々好きな分野だが、訪ねた先で和歌との出会いもあった。祥泉院の境内に地元

の郷土史家が建てた万葉歌碑があり、防人とその妻の歌が二首刻まれている。

我が行ききの息衝くしかば足柄の峰延ふ雲を見とと偲はね

都筑郡上丁服部於田

(私が筑紫に行くことがため息が出るほど苦しいのなら、足柄山峰に横たわる雲を見つつ思い出してほしい)

わが夫なを筑紫へ遣りて愛しみ帯は解かなあやにかも寝も

妻服部啓女

(私の夫を筑紫に行かせてしまいましたが、愛しいあまりに帯を解かず不安にかられて寝るのだろうか)

服部於田は天平勝宝七年(775)二月に相替(交替)として筑紫に派遣された都筑の上丁(奈良時代に防人の集団を統率する者)。現在の横浜市の区名となっている「都築郡」の文献上の初出と言われている。

服部は機織りを家職とした者の姓なので、この夫婦もそうした出自だったものと思われる。ただ詞書以外の記録はないため、この夫婦が都筑郡のどの辺に住んでいたのか、於田が無事妻の元に帰ったかどうかもわからない。

祥泉院の近くにみだけ台公園があり、その下には縄文時代中期の遺跡が眠っている。三軒の竪穴式住居跡が発掘され、その後埋め戻され、公園として整備された。この街は古代から人々が生活してきた土地だった。鶴見川の作った河岸段丘の台地の上で水害の危険性は小さい。かつては谷戸が複雑に入り組んだ地形だったが、山が削られ谷が埋められ、住宅地として造成された。

自宅の数メートル下にも遺跡が眠っているのかもしれない。

遺跡めぐりの後半は、稲荷前古墳群など市が尾周辺の古墳を見学した。市が尾横穴古墳群を訪れたとき、父(人見忠)の発案で、父母、私、妹の家族四人でこの周辺を歩いたことを思い出した。市が尾駅から尾根道依いに「原始から原子へ」と名付けられたハイキングコースが整備されていた。「原始」は古墳群などの遺跡、「原子」は尾根道の先の王禅寺にある東京の大学の原子力研究所を指す。

当時、市が尾古墳では大学の発掘調査が行われていて、学生たちが慎重に地面を削っていた場面覚えていた。

この時の父の歌が二首、「コスモス」(昭和49年10月号)に出ている。

昨年の秋つぶさに見たるかの古墳
毀れしならん宅地化を経て
内暗き古墳の中に黙々と測量なし
てをりし学生ら

この歌から一家で市が尾古墳を歩いたのが昭和四八年の秋だったことがわかる。

父はどんな思いで遺跡めぐりのハイキングを家族に提案したのだろうか。五人兄弟の長男的立場でありながら、

品川の実家を出て転勤のたび社宅を転々とし、ようやく横浜市の郊外に土地を求め一戸建ての自宅を新築した。

その古代の姿を自分で確認し、家族にも見せたかったのかもしれない。

父が亡くなり、昨年七月に三回忌も終わった。亡くなる前にもっと聞いておきたかった話がたくさんあったが、コロナ禍ゆえ叶わなかった。図らずも父と父の歌を思い出させてくれた遺跡めぐりだった。(人見 江一)

トリップとジャーニー

旅に出たかった。目的地はどこでも良く、電車に乗ってどこかへ移動するだけの、旅とも呼べないことをしたかった。普段は車移動ばかり、電車に乗ることはまったくない。

ある日、いよいよ駅で切符を買った。自動改札機はなく、ICカードをかざす機械のみ立っている。その横を、切符を持ったまますり抜けた。すこし待って乗り込んだ電車は、空席がぼつぼつある程度の混み具合。リュックをおろして座席に座る。日差しのある日で、この席だと暑いかもしれないと、座ってから思った。太陽を首筋に感じなが

ら景色を眺める。いつも車で通っている道と並走するように敷かれた線路。住んでいる街なのに、目線が変わるだけで旅人の気分だ。

うれしい。わたしはいつだってどこへだって行ける。景色はどんな変わり、いつしか見慣れない建物ばかりになった。「どのあたりだろうねえ」。隣におとなしく座る息子を声をかける。

二歳の息子は、日常生活で電車にふれる機会なんてほとんどないのに、いつの間にか絵本やテレビで電車を見ると目を輝かせるようになっていた。それならばと駅に通い、入場券だけを購入して電車を見送るようになった。すると、親としては彼を電車に乗せてみたくなる。そうして実行に移された二人旅だった。

どんな反応をするだろうと楽しみながら不安もあったが、グズることも、むしろはしゃぐことすらなく、彼は座席にちゃんと座り、まっすぐ前を向いていた。電車が自分を遠くへ連れていってくれる。そんなよろこびを感じている母親の横で、彼は何を思いながら憧れの乗り物に乗っていたのだろう。もしかしたら乗るよりも、外から手を振っているほうが好きだったのかもし

れない。

わたしたちは大きな駅へと運ばれて、買った物をすこしして、また小さな駅へと帰ってきた。「今日は電車に乗って楽しかったね」。「デンシヤ」とだけの声をかけると、「デンシヤ」とだけのうれしそうな返事があった。互いにどこへでもいけるわたしたちの旅が、これからもしあわせなものであることを願った。(高橋梨穂子)

生田川の夏

「正史、川の水を見に行つてこい」
僕が夏休みの宿題をしようと、机が置いてある仏間に入ったら、縁側で投網を繕っていた父が言った。

「もう鮎捕りにいけるん」

「今日から学校が休みになるけえ。行くぞ」

「やったあ」と僕はジャンプして、鴨居で頭を打った。宿題なんて夏休みの最後にやりゃいい。五年生の夏休み帳を放り出して外に出た。

七月終わりの太陽は、中国山地の低い山脈の遙か上から僕の頭上を照らした。大きな廂の影から急に出たので目が眩んだ。僕の家から生田川まで、田

圃が何枚も段々になつて続いている。

草いきれする小径を十分も駆け下ると、川幅二十メートルほどの川に出る。生田川は、この辺りで大川と呼ぶ江ノ川の支流である。小さな棚田を潤し、春夏秋冬澄んだ水が流れていた。

川土手には枯れ木の屑や欠けた茶碗など大水の残滓が残っていた。三枚の平たい板で組んだ木橋の上から見ると、流れに濁りはなく水量は随分減っていた。僕は鮎獲りに行きたくてたまらなかつたので、ちよつと川を見ただけで家に飛んで帰つた。

「もうえかつたよ」

「水はどこまで減つとつたか」

父の鮎漁は、川の瀬を走る鮎をめぐけて網を投げる。そして、網に入った鮎をヤスで突くという投網漁だった。水量が多いと、鮎の縄張りが広くなり網に入らない。逆に川が干上がるようだと、鮎は深い淵に移動していてこれも漁にならない。

「どこまでかよう分からん」

「五年生になつても、水もようみれんのか。まあええ」

いつもは僕のいい加減な性格を矯めようと叱責が続くが、夏休みの魚獲りの時だけ父は減法機嫌が良い。

昼寝を終えると、父、僕、弟の三人

は、祖父が稲藁で編んでくれた藁草履を履いて生田川に向かつた。「鮎が走つとるぞ。よう見てみい」と言われ、船津橋の上から覗き込むと、流線型の生き物がサツと上流に走るのが見えた。「お父ちゃん。あの黒いの」一年生の弟が尋ねた。「おお。よう見つけたの」。父は、頭がよくて聞き分けのよい弟を可愛がつていた。

鮎は、水苔を食んで成長するからなのか、姿態は青丹である。しかし、水の上からだすとすばしっこく動く鮎は黒っぽく見える。土手に群生している酸葉をかき分けて、川に降りた。

投網漁は、船津橋の下から川上の中州まで約一キロの間で行う。父は網を左肩に掛け、右手で網の端を持つて構えた。鮎が走ると右手を大きく引いて網を投げる。網はパラシュートのように円形に膨らんで川瀬に落ちる。間髪を入れず、父は箱メガネ、僕は水中メガネで、川底に沈んだ網の中を覗く。

「いた、いた」。三匹も四匹も網の中に入っている。左手で水をバシヤバシヤ叩く。そうすると、水の中の鮎は動かなくなる。僕は、右手に持っているヤスを鮎の背中に突き立てる。僕が

二匹目を獲つたとき、父は三匹目を箱メガネに入れ、「もうおらんけえ。網をあげるぞ」と言った。

膝下ぐらいの水量の川瀬に三、四回投網した後、水が腰くらいまであつて流れが速く、父が鮎溜まりと呼んでいる所にきた。網が川に放たれたと同時に、父と僕は、網の先に付いている錘を両足で踏みつける。落花生の殻ほどの錘では網が流れるからである。

鮎溜まりは、漁は難しいが大物がいる。僕は急いでごろた石の蔭を探す。頭をめぐけてヤスを入れた。ぐぐぐつと僕の右手に鮎の強い動きが伝わってくる。ヤスの刺さつた鮎が逃げようともがく。左手で鮎を掴み水面に顔を上げた。僕は長く水に潜っていたのでハッハッハッと、肩で息をした。

「父さん。大きいよ」

「何年に一回かの大物じゃ。ようやつたのお」

僕を一度も褒めることがなかつた父が言った。何だか大人に一歩近づいたような気がした。「わあ凄い。鮎みたいに大きい」と、弟は魚籠に入れた大物に触れて言った。中州まで何度網を

入れたか数えていないが、弟の魚籠は直ぐ一杯になり、父の大きな魚籠も一杯になった。

夏の太陽は西の里山の端にかかり、日差しが少し弱り始めた。青田を渡ってくる風も肌寒く感じるようになっていた。僕たちは、水を吸って重くなった藁草履をべたべたと言わせながら路についた。

白壁の土蔵の前で祖母が三度目の夏草を挽いていた。

「これ見てや。大きいじゃろう」

「こがなんは大川でも獲れんで」

祖母の実家は江ノ川の漁師だったから、鮎のことは詳しい。

「僕が突いたんじゃけえ」

「そうか、そうか。正史はようやったのお」

祖母は汗でくちやくちやくになった顔を綻ばせ何度も頷いた。僕は小学校三年生まで祖母と一緒に布団で寝ていたおばあちゃん子だったから、祖母が喜んでくれるのがとても嬉しかった。ジリジリと照りつける日差しを浴びて、冷たいくらい清流に身を浸す、生田川の夏がこうして順調に滑り出したのである。

朝の太陽が昇り、霧深い安芸の山河

に光の粒子が飛び交う、ここにただ生きていくそれだけでいい。何もなくていい、自然の移ろいの中にいるだけで幸せと思っていた。(菊山 正史)

九歳の私

「三つ子の魂百まで」という諺があるが、私は「人は九歳から変わらないう」という言葉がずっと気になっている。江国香織のエッセイや対談で読んだ言葉だ。江国は小説の中の人物について、まず「どんな子どもだったか」ということを考えたうえで、その言動や性格を描くのだと述べている。

そして私は最近、「九歳の壁」という言葉も知った。この時期の子どもは、抽象的な概念を理解し、自分を客観的に認識できるようになる。だからこそ、学習や友人関係などのさまざまな面で「壁」にぶつかることがあるそうだ。九歳というのは、やはりなかなか重要な意味をもつ時期なのだろう。

九歳の私を思い出してみると、その頃すでに片づけが苦手で、机の上はすぐに乱雑になり、しばしば忘れ物もしていた。また、ピアノを習い始めたり、「世界のお菓子づくり」という本が大

好きで、お菓子作りを始めた。スウェーデンのクッキーというものを焼いてみて、本の写真とは似ても似つかぬものになったのを良く覚えている。日常のことをきちんとしていないのに遠い国のことに憧れるのは、今でも変わっていない。

そして、九歳の時の大きな出来事は、父方の祖母が亡くなったことだ。私は、「お母さんが死んじゃうなんて、パパはどんなに悲しいだろう」と、父のことを本当にかわいそうだと思った。父は高校生の時に、すでに父親を亡くしていた。ところが、祖母の葬儀の際、父は普段とそう変わらない様子で親戚や同僚に接していて、私は内心とても驚いていた。こんなに悲しいことがあったのに、大人はすごいなあ、と。

あれから四〇年が過ぎ、親になった今でも、私は時折、大人はすごいなあ、と、誰かを見ていることがある。自分はまだ、ほんとうの大人からは遠いところにいるのだ、という思いがどこかにあるのだろう。

七歳の娘に毎日「ちゃんと片づけなさい」と言っているが、私の引き出しの中は今も、九歳のままのごちゃごちゃである。(田中 泉)